

## 『ドッズワース』(Dodsworth, 1929)の成立過程 をめぐって

斎藤 忠利

アメリカ最初のノーベル文学賞受賞作家シンクレア・ルイス (Sinclair Lewis, 1885—1951)の長編小説『ドッズワース』(Dodsworth, 1929)は、それまでのアメリカ文学の歴史に類を見ないほどのセンセーションをまき起こした問題作『本町通り』(Main Street, 1920)をもって始まる、ルイスの「偉大な十年間」を飾る最後の作品であるが、アメリカが世界の大国として国際舞台に登場し、ヨーロッパとアメリカの力関係が逆転する時代に生きたアメリカ人の問題——たとえば、アメリカ人の田舎者意識とか、アメリカ人のヨーロッパ体験の意味——をその生涯の問題とした作家ルイスのすべてが投入されているかの観のある力作である。

また、この作品は、ルイスの最初の妻グレイス・ヘガー (Grace Hegger)との離婚(1928年4月16日)と、ドロシィ・トムソン (Dorothy Thompson)との再婚(1928年5月14日)の時期と前後して執筆されていることもあって、ルイス自身の私生活がかなりのところまで作品化され、'photographic'な外面描写で知られるルイスの作品としては、人間の内面生活への洞察に富み、また、この作品が夫婦関係の機微を描いている点で、成熟した男女の性愛もしくは家庭生活が描かれることの少なかった従来アメリカ小説の傾向を考えると、なかなかの異色作であると言っても過言ではないであろう。

さて、ルイスがドロシィ・トムソンとベルリンで会ったのは、1927年の7月8日であるが<sup>1)</sup>、そのときドロシィはフィラデルフィアの *Public Ledger* 誌とニュー・ヨークの *Evening Post* 誌とのベルリン特派員をしており、それまでウィーンで四年間、ベルリンでさらに四年間の記者生活を送っていて、ヨーロッパ的な教養を身につけたアメリカ女性として広く知られ、ルイスは、ドロシィと会ったその日に、前夫との離婚が成立したばかりのドロシィに結婚を申し入れ、そのあと執拗にプロポーズを繰り返している。

ルイスが『ドッズワース』の原稿を書き始めたのは、それから間もなくのことらしいが、Mark Schorer, *Sinclair Lewis: An American Life* (1961)によると、1927年の9月に、ルイスは、ドロシイのすすめもあって、*American Mercury* 誌のために“The Man Who Knew Coolidge”と題する15,000語ほどの物語を書きあげ、そのあと、『ドッズワース』の原稿の執筆にとりかかったことになっている<sup>2)</sup>（なお、この作品の題名としては、最初、*Blind Giant*、もしくは*Sunset*、あるいは*Exile*という題名が考えられていた）。その後、『ドッズワース』の原稿は、同じ年の11月29日までに、50,000語ほど書きあげられ、明けて1928年の2月の末にドロシイがナポリに出かけると、ルイスもそのあとを追い、その旅行中にも『ドッズワース』は書き続けられた（ただし、その題名は、*Home*もしくは*A Man Alone*とする案が考えられていた）。それから4月の16日に、最初の妻グレイスとの離婚が成立すると、イギリスでの再婚生活を考えていたルイスは、4月23日にイギリスへ渡る途中で立ち寄ったローマでドロシイ・トムソンとの婚約を発表し、ロンドンに着いてからも『ドッズワース』の原稿を書きつぎ、5月14日にドロシイと結婚したルイスは、同月21日にハウス・トレーラーを使った新婚旅行に出発し、イギリス南部のソールズベリィに一週間滞在している間に、『ドッズワース』の最初の原稿を完成し、そのあとすぐに原稿の手直しを始めている。

なお、ルイス夫妻は、1928年の8月22日に、アメリカにむけ船で帰国の途につき、そのときには『ドッズワース』はほぼ完成していたとみられるものの、ルイスはその後も原稿に思いきった手直しを加え、また、その手直しは意外に手間取り、その年の10月の末になっても手直しは続いていたが、年末には校正刷が出るようになり、翌1929年の3月に『ドッズワース』は出版の運びとなった。ちなみに、その売れ行きは、いちおう、順調で、その年の7月10日までで、アメリカ国内だけの販売部数は85,000部、10月の株価の大暴落で売れ行きは止まりはしたが、それまでに約100,000部の売り上げがあった。

ところでルイスは、その作品の執筆にあたっては、綿密な調査ないしは資料蒐集を行ない、それと同時に詳細なメモを作成してから仕事にとりかかるというタイプの作家として知られている。そこで『ドッズワース』について、その点に関する調査してみると、まず、この作品中の登場人物に関する手書きのメモ（8頁）、また、この作品の第1章にあたるオリジナル原稿（タイプ原稿）（19頁）と、これを全面的に書き改めたタイプ原稿の一部（13頁）、それに最終稿のタイプ原稿（462頁）とその修正原稿（合わせて553頁）が残されている。

以上の資料は、ルイス自身がその生前、自分の母校であるイェール大学に寄贈したもので、現在、同大学のバイネキー稀覯本図書館 (Beinecke Rare Book Library) に保存されているが、筆者は 1973 年度の文部省派遣在外研究員としてイェール大学に留学中に、上記の資料を検討する機会を得たので、以下にその検討結果を紹介し、『ドッズワース』の成立過程をさぐる手がかりとしたい。

\*        \*

まず最初に、手書きのメモの形で残っている作中人物の一覧表は、「作中人物」, 「作中人物—2」, …, 「作中人物—6」と番号がつけられて合計 7 頁、最後の 8 頁目が「ヨーロッパのタイム・テーブル」ということで、作中人物のヨーロッパでの行動の予定表となっている。

作中人物の主なものに関して、そのメモを解読してみると、

サミュエル・ドッズワース (Samuel Dodsworth) —  
ゼニス市クロウ・ウィング自動車会社社長 (同社は、ユニット自動車会社に併合される)。1875 年にゼニス市に生まれる。1927 年には 52 歳。〔ルイスは最初、主人公の名を「リンカン」(Lincoln) としていたが、のちにそれを「サミュエル」に変えている。また「クロウ・ウィング自動車会社」(Crow Wing Motor Co.) は、最終稿では「レヴェレイション自動車会社」(Revelation Automobile Company) に変えられている。〕<sup>8)</sup>

フラン(セス—旧姓ヴェルカー [ドイツ語式の発音に従えば「フェルカー」]) (Fran(ces—née Voelker)) その妻。1884 年生まれ—1927 年には 43 歳、灰色がかったブロンド、活気に満ち、きちんとしており、きつい性格、きびきびしている (Ash-blond, vital, trim, hard, swift)。

#### その親友たち

タブ (トマス・J・) ピアソン (Tub(Tho[ma]s. J.) Pearson)  
53 歳。セントー州立銀行頭取; ロアリング・グラマー・スクールおよびイェール大学における級友; でっぷり太っていて、背が低い。野球 [好き] [? ]。

ヘンリィ・ハザード博士 (Dr. Henry Hazzard)  
(ウィネ [マック] 大学; ハーバード大学医学博士) 49 歳。心臓専門医。

エミリィ (Emily)

サム〔サミュエル〕の娘。1904 年生まれ。1926 年 1 月に 21 歳で、ハリィ・マッキー (Harry Mckee) 34 歳と結婚。

ブレント (Brent)

リンカン〔サミュエル〕の息子。1906 年生まれ。1926 年に 20 歳。イエール大学三年生。1927 年に卒業し、ハーバード・ロー・スクールに進学予定。

クライド・ロカート少佐 (Lockert, Major Clyde)

もとイギリス軍将校, 45 歳。現在はイギリス領ギニアの農園主。船で知り合う; 従兄の將軍ハーンドン卿は退役して, ウェストワード・ホー・モーターバイク会社社長。モーターバイクの熱烈なファン。〔「ロカート」は, 当初の予定では「マリオン」(Mullion)〕

オーベルスドルフ伯爵クルト (Kurt, Graf von Obersdorf)

オーストリアの名家出身。破産。国際旅行代理店, 銀行係主任。41 歳だが 31 歳に見える。背が高く, しまりがなく, チャーミング, 陽気だが生真面目。

ロス・アイアランド (Ross Ireland)

40 歳。クワッケンボス特集記事シンジケートのヨーロッパ特派員。もと, アメリカの新聞社の地方記事編集長兼主筆。

マダム・ルネ・ド・ペナブル (M[ada]mc Renee de Penable)

金持ちの, アメリカ生まれで, 太っていてユーモラスな未亡人。常時, ジゴロにとり巻かれている。

イーディス・コートライト (Edith Cortright)

一時, アルゼンチン, ボルトガル, ルーマニア駐在のイギリス大使をつとめたセシル・R・A の未亡人。ニュー・ジャージー州生まれ, 旧姓イーディス・クック (Edith Cooke)。ヴェニスに滞在。〔「コートライト」は, 最初, 「チルコット」(Chilcott) と予定されていた。〕

となっている。

つぎに, 「ヨーロッパのタイム・テーブル」について, その解説を試みると以下のごとくである。

1925 年 12 月に出発と決定。

1926 年 1 月, エミリィ結婚。

1926 年 2 月, イギリスへ。

ロンドン, 2 月—3 月。

リヴィエラ, 3 月下旬—4 月。

パリ, 3 月下旬—6 月上旬。旅行なし (no trips) [?]。

リンカン [サミュエル], ひとり帰国。フラン[セス], スイスへ。—8 月, 9 月。

パリ—10 月—1927 年 1 月。

漫遊旅行 (Gen[era]l travel) [?] 2 月。

ドイツ, ついでベルリン,

1927 年 3 月—6 月 [欄外に, 「エミリィ出産 (3 月, [もしくは] 1 月 26 日)」]

フラン[セス], クルト [との結婚] を考える。

破局, パリで始まり, 6 月 27 日に結着。—彼女 [フランセス], パリで離婚。

リンカン [サミュエル], ひとりで放浪。

結び, 1927 年 { 秋  
                  } しくは冬 }

『ドッズワース』の草稿は, おそらく, このメモをもとに書き始められたものと推定されるが, 上述したようにバイネキー稀観本図書館に保存されているオリジナル原稿 [第 1 章のみ] は, その第 1 頁の欄外の書き込みによると, ベルリンのホテル, ヘルクレス・ハウス (Herkules Haus) で, 1927 年の 11 月 3 日に書き始められたことになっており, その題名は,

EXILE

A Novel by

Sinclair Lewis

(『流浪生活』  
小説  
シンクレア・ルイス作)

となっている。なお, この題名に関しては, 欄外に手書きで, 「別の題名: *Dodsworth/ A Man Alone*/ただし, O. Johnson が使っていないとすればだが? <sup>4)</sup>」と書き込まれている。またルイスは最初, 本文中の主人公の名を 'Lincoln' Dodsworth としておい

て、のちに 'Lincoln' を 'Samuel' と修正し、欄外にやはり手書きで「リンカン・ド  
ッズワースとあるところはすべて、サミュエルと読みかえること」と指示している。

オリジナル原稿に登場するサミュエル・ドッズワースは、卒業を 2,3 カ月後にひ  
かえたイェール大学の四年生で、イェール大学きってのフットボール選手として鳴ら  
し、忙しい選手生活の合い間を縫って、学期末試験に通るためのわずかの読書と、そ  
の機会こそ少ないが、孤独な散歩を楽しんでいる。だがしかし、四年間の大学生活を  
終えようとする多くの青年たちの常として、サミュエルも、学業に打ち込めなかった  
学生生活を歎き、また自分の将来のことを考えて、その身のふり方に迷っている。

そのようなときにサミュエルの進路をきめる助けとなったのは、南アメリカで活躍  
するアメリカの技術者たちの姿を描いた、リチャード・ハーディング・デイヴィス<sup>5)</sup>  
の作品をサミュエルが読んでいたことだった。サミュエルは、1,2 年、技術関係の勉  
強をしたうえで技術者となり、そのことを通じて、かねてから秘かに抱いていたロマ  
ンチックな夢を実現しようとする。サミュエルは、スポーツ選手としての生活が忙  
しく、音楽や美術に親しむ機会がほとんどなかったが、それでも、秘かに詩歌や音楽  
を愛好する気持はあって、それはウィリアム・ライアン・フェルプス先生<sup>6)</sup> という若  
い大学講師の指導の賜物だった。

それから 3 年後、機械工学を修めたサミュエルは、「ゼニス・ロコモティヴ・ワ  
ークス」(Zenith Locomotive Works) という会社に就職する。〔このあと、オリジナ  
ル原稿は、9 頁から 11 頁までが欠けている。〕サミュエルが、ヨーロッパ旅行から帰  
ったばかりのフランスに会うのは、イェール大学卒業後 7 年目だが、サミュエルが  
有名なフットボール選手だったことは、いまだに人々の記憶に残っていて、フランセ  
スのほうでも、サミュエルのことを知っており、フランスが 8 歳頃るとき、ドッズ  
ワース家の庭のリンゴの実を摘み取ろうとしてサミュエルに追い払われたことがあ  
ったことなども覚えていた。

ともかく、こうしてサミュエルとフランスの間は、二人がいっしょにダンスを楽  
しんだりするうちに急速に発展し、折しも、「クロウ・ウィング自動車会社」(Crow  
Wing Automobile Company) が新設されたのを機会に、サミュエルは、その会社の  
製造・設計部門に移り、フランスのヨーロッパかぶれにいささか辟易することもあ  
ったが、フランスの魅力の虜となって、フランスと結婚する。

会社内ではサミュエルは、めきめきと頭角をあらわし、新型車の開発と、高級車  
のみならず低廉な自動車の製造・販売を進言したりするが、フランスと結婚してから  
5 年目の 1908 年に、他社が 4 ドア型の新型車の開発を始めるという情報があったの

で、サミュエルは自社でも同じ新型車の開発をすべきだと進言して、社長と対立し、製造部門の副部長の地位が危くなるが、義父が出資してくれたこともあって、会社の株式の 23 パーセントをおさえて副社長におさまり、以後 20 年間、会社経営に専念することになる。

以上が、『ドッズワース』の第 1 章のオリジナル原稿の大要であるが、すでに述べたようにルイスは、これを全面的に書き改めて、いわば第 2 稿とも言うべきタイプ原稿を作成している。その執筆は、第 2 稿第 1 頁の欄外の書き込みによると、1928 年の 1 月 20 日にベルリンで始められたことになっており、作品の題名は、オリジナル原稿のものを踏襲している。この第 2 稿でも、サミュエルはイェール大学の四年生として登場し、この四年間フットボールの選手として英雄視されておりながら、間もなく卒業ということで影が薄くなっている、とされ、ひとり気儘に散歩に出て、ニュー・ヘイヴンの町を見下ろしながら、はるかな未知の世界に想いを馳せている。ただし、第 2 稿におけるルイスの叙述は、とくに最初の部分が簡潔になっており、オリジナル原稿の 4 頁と 1/3 頁ほどの内容が 1 頁半に圧縮されている。そのあとも、オリジナル原稿はすこしずつ切りつめられているが、残念ながら、第 2 稿でも、オリジナル原稿で欠けていた 9 頁から 11 頁までの部分にあたるどころ（6 頁から 8 頁まで）が欠けている。〔これはあくまでも推測の域を出ないけれども、最終稿との関係を考えてみると、その欠損部分は、もちろん、なにほどこかの修正を加えられて、最終稿の書き出しの部分として用いられたのではあるまいか。とにかく、オリジナル原稿の 12 頁以下および第 2 稿の 9 頁以下は、最終稿の 5 頁から、その照合関係を確認することが可能である<sup>7)</sup>。〕 つぎに、第 2 稿に関して指摘しておかなければならないことは、その第 10 頁目が 2 枚存在し、その 1 枚目は、半分までで、その最後に「オリジナルの 16 [頁] の上端につづく」(Continue with top of original 16) と書き込まれ、もう 1 枚の第 10 頁は、その後半から、たしかにオリジナル原稿の 16 頁以下を手直しして利用している点である。つまり、第 2 稿は、単にオリジナル原稿を切りつめただけのものではなく、ときに両者の交流とでも言うべき操作が行なわれていたことになる。なおオリジナル原稿の 16 頁以下 22 頁までの部分は、第 2 稿では 11 頁以下 15 頁までの 4 頁と 1/3 頁に圧縮されているが、第 2 稿の最後には、現存するオリジナル原稿には見当たらない、3 行の文章がつけ加えられている<sup>8)</sup>。

ここで最終稿に目を転ずると、その第 1 章では、「ゼニス・ロコモータヴ・ワークス」の副工場長 (assistant superintendent) になっている 28 歳のサム [サミュエル]・ドッズワースが、ゼニス市内のあるクラブで開かれた舞踏会に、颯爽と新型車

で乗りつけるところから話が始まる。そして、その舞踏会でサムは、一年間のヨーロッパ生活を終えて帰国したばかりのフランセスと会い、それから二人の交際が始まり、二人は結婚することになる。そこで、オリジナル原稿ならびに第2稿との関連を考えてみると、大学生時代のサムを描く部分が完全にカットされてしまい、また、サムがイェール大学きってのフットボール選手として鳴らしたことも、最終稿では「イェール（1896年組）では、彼は平均よりはましなフットボール選手だった<sup>9)</sup>」と、簡単に片づけられている。またオリジナル原稿と第2稿では、ロマンチックな夢を追う青年らしさを持ち合わせているサムが、クラスメートのタブ〔トマス〕・ピアソンと世界一周旅行の夢を語り合う場面もあったが、けっきょくその場面などもカットされてしまうことになり、そのために最終稿では、新型車を乗りまわして得意になっているサムが、ヨーロッパ帰りのフランセスと会うことによって、一種の競争心をかり立てられ、ヨーロッパ旅行を考えるようになる経緯だけが強調される結果になっている。

マーク・ショラー氏は、『ドッズワース』にルイスの力量の衰えが見られるとした E. M. Forster の意見を紹介しながら、ルイスは、アメリカ社会において第一次世界大戦の終結時から大不況が始まる時までに進行していた価値観の転換にもかかわらず、そのことによって破産してしまったかに思われる中産階級的・中西部的価値観にしがみついて、そのような価値観をサム・ドッズワースによって代表させようとしている、というような意味のことを言っているが<sup>10)</sup>、自動車産業をもってアメリカ文明の象徴的表現とするならば、サム・ドッズワースをアメリカ人の典型とすることも可能であり、その名前としては、'Lincoln' よりも 'Sam[uel]' が適切であることは、擬人化されたアメリカないしは典型的なアメリカ人が 'Uncle Sam' と呼ばれることから明らかで、ルイスが 'Lincoln' を 'Sam[uel]' に変えたのは、おそらくそのような理由からであろう。〔なお、このサムがアメリカ中西部出身の人間として、ヨーロッパ帰りのフランセスに対して劣等感をおぼえつつ、心が惹かれていくという設定には、田舎町出身のルイス自身がアメリカ人としてヨーロッパ文化に対して感じざるをえなかった憧れと反撥が反映されており、またサムがフランセスとのヨーロッパ旅行中に夫婦関係の危機に陥り、彼がフランセスとの結婚生活を解消し、コートライト未亡人と再婚することによって再起を図ろうとする『ドッズワース』の結びは、ヨーロッパに対するアメリカ人の軽薄な憧れと反撥の終焉と、真のヨーロッパ理解を反定立とするアメリカ人の自己確認の方向を示唆している、と考えられるが、ここでは『ドッズワース』の作品論に立ち入ることは避けることにしたい。〕

サミュエル・ドッズワースなる人物の造形にあたっては、この人物像の輪廓の曖昧

さを指摘した批評に関連してマーク・ショーラー氏が述べているように<sup>11)</sup>、おそらくルイスの念頭には、イエール大学でスポーツ選手として活躍し、のちに実業家として成功した人物、たとえばサミュエル・モース (Samuel Finley Breese Morse)(1791—1872) [モールス式電信機を発明したことで知られる] のことがあったであろう。それから、『本町通り』のケニコット先生 (Dr. Kennicott) のモデルと考えてもよい、ルイスの兄クロード・ルイス (Claude Lewis) によって代表されるような、典型的な中西部人の特質がつけ加えられ、その上で、都会的なセンスを身につけていた妻に対して劣等感をおぼえざるをえなかったルイス自身の自画像として、サミュエル・ドッズワースは描き出されたと考えられる。ともあれ、ルイスが、サミュエル・ドッズワースとその妻フランセスの関係の中に、彼自身と最初の妻グレイスの関係を描き込み、サミュエル・ドッズワースとコートライト未亡人の関係の中に、彼自身とドロシィ・トムソンの関係を描き込んでいることは、疑いを容れないところである。

すでに述べたように、『ドッズワース』の最終稿は、ドロシィ・トムソンとの新婚旅行中に書きあげられ、そのあと少なくとも半年以上もかけて手直しが行なわれているが、その手直しのあとを具体的に示すために、著作権の関係もあるので、第1章の最初の部分をすこしだけ、以下に紹介してみたい。ただし、カットされたところは、〔 〕で示し、加筆されたものは、〈 〉であらわすこととする<sup>12)</sup>。

#### CHAPTER [1] <1>

The aristocracy of [the city of] Zenith were dancing at the Kennepoose Canoe Club, [this spacious moon-washed evening of August.] They two-stepped on the wide porch, with its pillars of [unpeeled] pine trunks, its bobbing Japanese lanterns; and never were there dance-frocks with wider sleeves nor hair more sensuously piled on little smiling heads; <never an August evening more moon-washed and spacious, and proper for respectable romance.>

Three [parties] <guests> had come in these new-fangled automobiles, for it was now 1903, [practically] the climax of [the ages] <civilization>. A fourth automobile was approaching, driven by Samuel Dodsworth.

The [whole] scene was [like] a sentimental chromo—[moonlit] cringing lake, [and] lovers in canoes singing “Nelly Was a Lady,” [all] very lugubrious and happy—[yet] <and> Sam Dodsworth enjoyed it, [for he was sentimental himself, though he looked like a granite boulder.] He was a [very] large and formidable young man, [tall and broad,] with a healthy brown mustache and [burst] <chaos> of brown hair on a massive head. He was <, > [now, at the age of] at twenty-eight, assistant superintendent of that most noisy and unsentimental institution, the Zenith Locomotive Works, and in Yale (class of 1896)

he had played better than average football [.] <,> [But] <but> always he thought [about horizons and in the day which would never come planned to be an explorer.] <well of the most sentimental brands of moonlight.>

Tonight he was particularly uplifted because he was driving his first car. And it was none of your old-fashioned "gasoline buggies," with the engine under the seat. The engine bulked in front<sup>13</sup>, [Not the highest hour of a Yale-Harvard game had been fuller with pride for Dodsworth than this, his] <It was Sam's first> first (*sic*) public showing of his automobile. [It was] <Here was> none of your old-fashioned gasoline [buggies with the motor under the seat, the motor bulked in front] under a proud hood over two feet long; and the steering column was not straight <,> but rakishly tilted <.> [toward the driver] [—very] <The car was> sporting and rather dangerous, and the lights were powerful affairs fed by acetylene gas. He sped on with a [sense] <feeling> of [power, of] dominating the universe, at fifteen [and even eighteen] dizzy miles an hour, [by past (*sic*) the glitter of Lake Kennepoose, past summer cottages where on the front porch jolly groups sang "Won't You Come Home, Bill Bailey," <"Carry Me Back to Ole Virginny,"> to the canoe club and the string of bobbing lanterns along the brilliant canoe club above the beach ]

At the Canoe Club, Tub Pearson, admirable in white kid gloves, greet (*sic*) him. <Tub—Thomas J. Pearson—round and short and jolly and class jester and class dandy at Yale, had been Sam Dodsworth's roommate and chief admirer in college days, but now he had <begun to> take[n] on an irritable dignity as teller and future president of his father's bank in Zenith.>

"It runs!" [he] <Tub> marveled, as [Dodsworth] <Sam> stepped in [lordly] triumph from the car. "I've got a horse all ready to tow you back!"

[Motorists of 1903 had to endure a great many such sparkling jests ] <Tub had to be witty, whatever happened.>

"Certainly it [does.] <runs!> I'll bet I was up to eighteen miles an hour!"

"Yeh! [Great things, these automobiles! I'll bet] <I'll bet that> some day [they] <automobiles'll> run forty miles an hour!" Tub jeered.

"Sure! Why, they'll just about drive the poor old horse right off the highway!"

"They will! <And> I'm thinking of tying up with this new [Crow Wing] <Revelation> company, to manufacture 'em," [growled Dodsworth.]

"Not seriously, you poor [nut?] <chump?>"

[ "I certainly am!" ] <"Yes!">

わずかこれだけの引用では、決定的なことは何ひとつ言えないが、やはり手直しによって最終稿が改良されていることは、いちおう、予想されるところであり、カットされている部分について調べてみると、場合によっては叙述が簡潔となり、断定的な

表現が効果をあげ、また、書き直しを行なっているところでは、苦心のあとが偲ばれる。たとえば、第2パラグラフで、‘...it was now 1903, practically the climax of the ages’を‘...it was now 1903, the climax of civilization’と修正して断定的な表現になっているところが面白く、また、第3パラグラフで、‘The whole scene was like a sentimental chromo— ...’を‘The scene was a sentimental chromo— ...’と書き直すことによって、「その光景は、感傷的な着色石版画そのものだった」と言いきって、もとの散文的な文章が詩的な高まりを見せるようになっている。

この引用文の最後に近いところでは、‘Motorists of 1903 had to endure a great many such sparkling jests.’が‘Tub had to be witty, whatever happened.’と書き直されているが、ここでは、新型車で舞踏会の会場に乗りつけたサム・ドッズワースにむかって、親友のタブ・ピアソンが「お帰りに馬を用意しておいたよ」と皮肉を言ったことに対して、作者のルイスがコメントをしていると解されるが、もとの文章では、1903年という早い時期に自動車を運転したりする人間は、さかんに皮肉を言われたものだ、というような一般論の形で作者のコメントが述べられているのに対して、書き直された文章では、作者のコメントが、好機と見れば、しゃれをとばさずにはおれないタブ・ピアソンの性格を描く文章として巧みに活かされている。

なお、以上に紹介した最終稿の一部を、刊行された作品とつきくらべてみると、この部分についてだけでも、ルイスは、最終稿を手直ししたうえ、校正刷の段階でもさらに数カ所の修正を行なっていることがわかる。『ドッズワース』全体に関しては、最終稿に対する加筆・修正は相当の分量にのぼり、校正刷の修正頁まで加えると、修正原稿は91頁にもおよぶ計算となり、最終稿の2割増しであって、この作品に対する作者ルイスの打ち込み方には並々ならぬものがあつたと言ふべきである。

## 註

1. 以下の記述は、Mark Schorer, *Sinclair Lewis: An American Life* (1961) に負うところが多い。
2. Cf. *Ibidem*, p. 490.
3. [ ] 中の記述は、以下、この手書きのメモの紹介をしているところでは、すべて筆者の註もしくは補足説明。
4. O. Johnson とは、*The Eternal Boy* (1909), *Stover at Yale* (1911) など、少年を主人公にした物語で知られるアメリカの小説家 Owen McMahon Johnson (1878—1952) のことかと思われる。

5. Richard Harding Davis (1864—1916) は、アメリカのジャーナリスト・小説家・劇作家。 *Gallegher and Other Stories* (1891) 以下 11 巻の短篇集で知られ、また南アメリカを舞台にした *Soldiers of Fortune* (1897) ほか数篇の小説、25 編にものぼる戯曲を書いている。
6. William Lyon Phelps (1865—1943) アメリカの文学者。イエール大学を卒業後、1892 年に母校に赴任し、1901 年から 1933 年まで英文学の教授をつとめた。ちなみに、ルイス自身も、イエール大学に在学中にフェルプス教授の指導をうけ、大学院に進学して博士号を取得しようと考えたほどであった。
7. オリジナル原稿の 12 頁、第 2 稿の 9 頁は、ともに ‘entertained famous German professors, when they came lecturing and looking, …’ と始まるが、最終稿の 5 頁も同じ言葉で始まっている。
8. その 3 行の文章をここに引用しておく、‘But he was too busy to be discontented; and now and then he managed to believe that Fran was not merely his wife but that she really loved him.’  
 なお、この文章は、そのまま最終稿に引きつがれ、改訂作業の結果、‘But he was too busy to be discontented; and he managed to believe that Fran loved him.’ となった。
9. Cf. ‘…in Yale (class of 1896) he had played better than average football, …’ 「最終稿」 pp. 1—2.
10. Cf. Mark Schorer, *op. cit.*, pp. 516—517.
11. Cf. *Ibidem*, p. 517.
12. 以下に紹介するのは、「最終稿」 pp. 1—3.
13. 「最終稿」の p. 2 は、ここで終わり、‘to page 3’ と指示がある。この p. 2 は、「最終稿」の手直しを行なった際に挿入されたと思われるふしがある。